

論文の内容の要旨

論文題目 <不如帰>の変容—日本と韓国におけるテキストの<翻訳>
氏名 権丁熙

本稿は、徳富蘆花の『不如帰』が発表された明治 31 (1898) 年以來、様々なジャンルの「翻訳書」と「俗書」が作り出された状況をとらえ、それをテキストの<翻訳>という観点からの論じた試みである。

<不如帰>は時代が変わるにつれ、その読まれ方も重点の置かれ方も変わり、「家庭の文芸」が要求される時代に合わせて、次第に男の「職分」の側面が姿を消して、より「家庭の出来事」や「夫婦愛」の面貌が強調された。こうした読まれ方と相応するかたちで、諸「翻訳書」と「俗書」も続出していった。その意味では、<不如帰>の受容を徳富蘆花の『不如帰』に収斂させるべきではなく、時代による読みの変遷と同時に、時代を追って読者層が大きく変化していく様を見てとることが重要である。

<不如帰>受容の様相の解明を目的とする本稿は、主に読者論的な観点から分析することで、<不如帰>の受容に働いた諸要素や条件を探ろうと試みた。つまり、作家・読者・出版形態など、一連の要素の連関に、書物の形態上の変化を合わせて考えることで、新しい読者層へ広がっていく、そのプロセスを浮き彫りにしようとした。こうした観点に立って、受容の段階を分節化し、具体的なテキストを対応させることで、段階によって受容の変化を浮き彫りにする論を展開した。その結果、以下のような点が明らかにされた。

第 1 章では、『国民新聞』の新聞連載小説として発表された『小説 不如帰』を、同時代の文献に照らし合わせることで、「男性読者層」を意識していた側面に焦点を当てた。その結果、徳富蘇峰の「非恋愛」論と軍人勅諭を中心とした「職分」を最優先にする論理が交錯する構図が浮き彫りにされた。そしてこの構図に通底している「立身出世主義」とでもいべき文脈を提示した。その意味で『不如帰』は、従来の「夫婦愛」を標榜する物語とは裏腹に、「夫婦愛」を抑圧し「職分」の道に帰結することを「男らし」とする、「男」の主体性を問う物語として見直されるべきことを提起した。

第 2 章では、『家庭新詩 不如帰』の分析に入る前に、新聞小説から単行本『小説 不如帰』の出版に至る経緯と主な変化を述べた。新聞連載小説と単行本『小説 不如帰』にはそのイメージにおいて顕著な差異が存在するが、単行本の成立過程、とりわけ黒田清輝による口絵の成立過程に迫ることで、新聞連載小説と単行本とのイメージの落差の淵源を探ろうとした。黒田清輝による口絵によって、浪子は一層「同情」の表象とされ、単行本の体裁、自然主義の浮上と「恋愛」の発見など諸要素が絡んで、「夫婦愛」のイメージがより強化されたことを論じた。そのうえ、日露戦争後の明治 38 年 (1905) に刊行された『家庭

新詩『不如帰の歌』は、単行本の「夫婦愛」の面をさらに強化したうえで、ジャンルの変換の問題の切り口として、すなわち、「吟誦」や「朗誦」といったその読書形態が、以後の様々な口承演芸「不如帰」の先駆けとしての意義を持つ。さらに、『家庭新詩 不如帰の歌』は、戦闘場面を詠うに当って、日露戦争の軍神広瀬武夫のイメージを交錯させるなど、当時の軍神広瀬中佐ブームとも関連している。

第3章で取り上げた『脚本 不如帰』においては、小説を脚本化することによって、原作の視覚的・聴覚的な要素が強化され、原作の地の文がセリフとなるなどの変化が見られる。このように、〈不如帰〉の受容の特徴は、メディアの変化と不可分に対応している点であり、その意味で〈不如帰〉はメディアそれ自体だったのである。

所謂「新しい女」の登場以来、「新しい女」と「古い女」という対立構図を踏まえた言説の中で、〈不如帰〉は「古い女」の記号として流通し、「涙」「新派」「女性」という結びつきが固定化された。このように、〈不如帰〉のイメージが「古い女」や家などの「古い」価値を帯びるこの時期、〈不如帰〉は韓国において受容された。その際、蘆花の『不如帰』だけではなく、様々な「翻訳書」や「俗書」なども流入したが、こうした「翻訳書」や「俗書」によって通俗化されたイメージと物語は、韓国語の翻訳／翻案にも影響を与えた。

韓国に『不如帰』が受容された時期は、日本では『不如帰』が既に文壇の関心の外に押し出された時期であり、〈不如帰〉は最も古い価値の記号とされたその時点で、朝鮮で受容されたと言えるのである。

第2部では韓国の〈不如帰〉の変容を取り上げた。1910年の日韓併合以後、新しい体制を迎えて不安が募る中、1912年という時期に急に続々と翻訳／翻案が登場した。そうした動きのなかで行われた演劇化は、内地の価値を先取りし、確かな地位を確保しようとする意味を持った。ただ、実際には日韓の間には様々な葛藤もあった。本稿で対象を1912年から1913年の短期間に絞るのは、〈不如帰〉の受容がこの時期において、特定の価値を伴う文化現象としての性質を帯びているからである。

韓国語での翻訳／翻案に共通的な特徴として考えられるのは、「孝」の優位のなかで、「愛」にまつわる翻訳にズレが生じたことが挙げられる。例えば、浪子の海への投身の場面に、『心清伝』の心清の投身行為が重ね合わせられることによって、「愛」が「孝」との関係のなかで語られ、「愛」は「孝」の記憶や感情を起動させることになるのである。「愛」にまつわる翻訳が、つねに「孝」との関係のなかで成立するのは、当時の『毎日申報』の論説や、朝鮮総督府による「孝」と「忠」を強調する支配方針とも深くかかわっていた。この日本、すなわち内地に価値の根拠を求める志向は、日本人救援者というモチーフを生んだ。ここでは一人の翻訳／翻案者の文学の個性や文体が論じられる以前に、その翻訳／翻案が内地の価値と朝鮮の現実をいかに接続するかが、評価の基準となった。日韓併合後、最大の社会的関心事は、日韓間の葛藤の解消、また家と社会、国家の調和を生み出す制度の構築であり、社会における調和が要求される時代であった。そうした中で〈不如帰〉の受容はなされたのである。1912年当時の日本では、『不如帰』は「新しい女」の出現とともに「古い

女」の表象とされた。しかし、植民地朝鮮では、新しい内地の価値として翻訳されたわけである。

韓国における〈不如帰〉の受容は、この時期、新小説史からみても、親子関係中心の悲劇から、嫁と姑を中心に据えた物語へとシフトさせる動きの、さきがけとなったという意味で、重要な位置を占めるのである。さらに、韓国における翻訳／翻案には、『家庭新詩 不如帰の歌』『脚本 不如帰』『漢訳 不如帰』など、原作以外の「翻訳」と「俗書類」が関連していることが見えてきた。

このように、それぞれの翻訳／翻案の方向性を考察することで、原作の『不如帰』の特色が浮かび上がるよう試みた。〈不如帰〉は、このようなさまざまなモチーフへの接続が可能であった点に、物語の特徴があるといえるだろう。